

～ヨーロッパ歴史芸術散歩～第 2 弾 「オペラハウスの謎」

7 月 7 日(日)午後 1 時半～3 時半

講師：小宮正安氏(横浜国立大学准教授)



昨年の～ヨーロッパ歴史芸術散歩～「ビールとワインで見るヨーロッパの謎」に続く第 2 弾、「オペラハウスの謎」を鷺宮 3 丁目出身の小宮先生に講演していただきました。猛暑の中を 70 人もの方が参加され、熱心に聞いていただきました。時代とともに変遷したオペラとオペラハウスについて、小宮先生はユーモアを交えた巧みな口調で語ってくださいました。

パリオペラ座(ガルニエ宮)を舞台にした舞台や映画でおなじみの「オペラ座の怪人」をご存知の方は多いと思います。パリオペラ座の客席は身分によって厳格に決められていました。絨緞の敷かれた栈敷席に続く階段は一般の観客が通ることはできません。怪人は複雑に交錯した建物や観客席、地下の構造を熟知していました。怪人は、身分社会の産物でした。



パリオペラ座は古そうに見えますが、築 150 年程度。石造りの建物が多いヨーロッパでは、そう古いものではありません。

ルネサンスの時代、古代ギリシアの演劇の復興を目指して歌うようなセリフの劇であるオペラが誕生し、古代ギリシアの円型劇場をアレンジした劇場が作られました。

バロック君主の時代になると、財政、軍事だけでなく文化が高く評価されるようになりました。オペラハウスは王侯貴族や富裕な市民の社交と娯楽の場としても発展しました。オペラは歌手、合唱団、演奏者、舞台装置や衣裳などがますます豪華になり、総合芸術になっていったのです。また、スター歌手のテクニックを見せるものとなり、音域は広がり、細かい旋律の難曲が生まれます。ヴィヴァルディのオペラからアリアの一部を聴かせていただきましたが、テクニックと音域の広さに圧倒されました。

やがてフランス革命を経て市民の時代になると、ブルジョワジーは王侯貴族の模倣をするようになります。王の時代には意外に質素だったオペラハウスが、豪華な栈敷席、舞台袖の彫刻、シャンデリアなど、外観とともに宮殿のようなものになったのは、この時代です。

ゴージャスになったオペラハウスに対し、ワーグナーは自分の作品を上演するためにバイロイト祝祭劇場を建てました。装飾を排し、観客を眠らせずに舞台に集中させるために椅子は堅い木製のものになっています。



現代は各国にオペラハウスがあり、各地の特色を持ったオペラが盛んに上演されています。最後にヴェルディの「椿姫」が現代のセレブにアレンジされた DVD を見せていただき、時代とともに変わる様子を知りました。

参加した皆さんからは、歴史の勉強になった、オペラハウスに行きたくなった、ぜひ第 3 弾をやってほしいという声が聞かれました。